IV－20

地域のイメージ構造に関する分析　～室蘭市の事例～

室蘭工業大学　学生員　石崎　裕幸
室蘭工業大学　正　員　斎藤　和夫
室蘭工業大学　正　員　田村　亨
専修大学北海道短期大学　正　員　桝谷　有三

1．はじめに

近年の都市・地域計画では、より豊かな生活を送るために景観的要素を重要視した計画や、「個性豊かな地域づくり」ということが、基本構想等の段階から課題とされることが多い。これまでの経済活動を優先し、機能的な面だけが充実しているような環境の中で、住民が豊かであるとは思えなくなっていることは歪めない。こうした状況から、都市・地域計画者の立場としてより豊かな環境を提案していくためには、高度化・多様化した住民の価値観や潜在意識を把握し、取り入れていくことが、より重要となってくると思われる。

また、その土地に培われた風土や文化を生かし、個性豊かなまちづくりを行うためにも、まず自分達の住んでいる都市や地域の歴史・伝統・文化を再認識するとともに、地域が持つイメージについても様々な角度から調査し、その地域の個性を考えることが重要である。

2．本研究の目的

本研究では、都市・地域の「顔」または「個性」とも言える都市のイメージを定量的に把握し、その特性と構造を明らかにすることが目的である。このイメージの捉え方としては、分析対象都市の外部からどう評価されているのかという受動的なイメージを探るのではなく、対象都市に住む人々の抱くイメージを明らかにし、それをもってその「都市・地域の個性」と定義しようとするものです。

また、本研究で取り上げるイメージとは、都市の視覚的・構造的な面だけに着目するのではなく、住民が日常生活の中で感じられるさまざまな要素も含めて捉えることを目的としている。

さらに、都市を構成している地区ごとに分け、地区住民が自地区に対して抱くイメージを定量的に捉え、地区の特徴を明らかにしていくことも試みている。

3．イメージ調査の概要

（1）調査対象地の概要

本研究では室蘭市（人口11万7千人、面積80.42Km）を対象とし、さらに市を９つの地区に分け、市全域と居住地区に関するイメージ調査を、市民を対象に行った。この地区分けの考え方は、市民の都市に対するイメージに、日常生活圏である居住地域に対するイメージが、何らかの形で現われてくるという仮説に基づいている。そこで、室蘭市の特徴である地形条件に大きく影響された市街地形状と地域間の結びつきに則したまとまりに基づき地区分けを行った。図－１は室蘭市の地区構成である。

図－１　調査対象地の構成

An Analysis on the Image Structure of City and Community Levels.
by Hiroyuki ISHIZAKI,Kazuo SAITO,Tohru TAMURA,Yuzo MASUYA

（２）形容詞対の選定

都市・地域をイメージする際、一般的に使われる言葉（形容詞）をできるだけ列挙し、ＫＪ法を応用し形容詞を統合していくことによって、最終的に２３項目の形容詞対を選定した。ここでは、視覚的・構造的な面を表現する形容詞対からさらに拡大してまちの雰囲気や質といった面、文化的な面を表す形容詞対を過不足なく選ぶことができたと思われる。

調査方法は、これら２３項目に沿って、居住地区と市全域の両方に関して５段階評価をしていくというものである。

（３）都市構成地物の選定

室蘭市の「都市形成基本計画」や市政案内など多くの資料から収集、現地調査を行い、自然、歴史・伝統、経済・産業、都市施設、交通施設、地域特性などの分野から９５個の構成地物を選定した。

調査方法は、これら９５項目の中から分野に関係なく５項目選択回答していくというものである。

（４）調査の概要

アンケート調査の概要を表－１に示す。

表－１　調査の概要

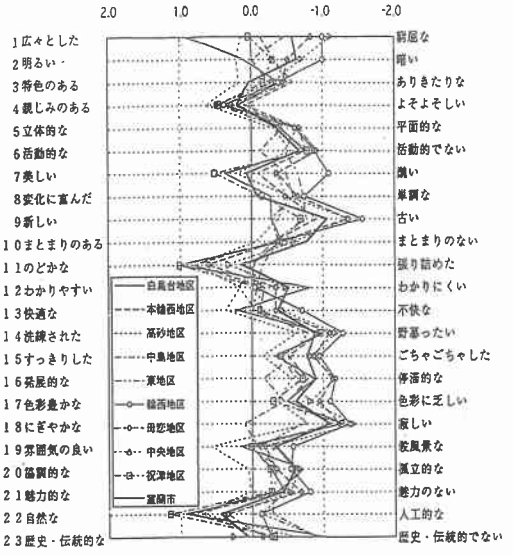
調査方法	訪問配布、訪問回収 ；住宅ｾﾞﾝﾘﾝ地図に基づき無作為抽出
配布、回収	配布１４００件、回収１０９４件 ；回収の詳細は以下の通り 白鳥台地区；１１２件　本輪西地区；１２０件 高砂地区；１４９件　中島地区；１７７件 東　地区；１１５件　輪西地区；　９１件 母恋地区；１１０件　中央地区；１１０件 祝津地区；１０６件

４．イメージ特性

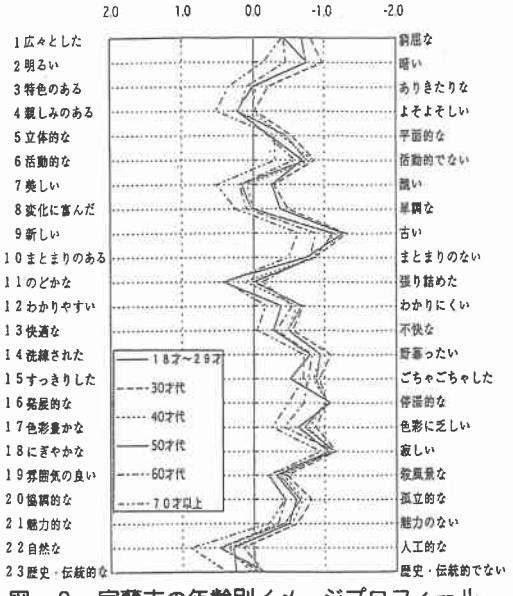
イメージ調査による結果を定量的に処理した結果、市民が室蘭市に対して抱くイメージ、つまり室蘭市の特性は図－２に示されるプロフィールのようになる。この図は居住地区に対するイメージと室蘭市に対するイメージを表わしている。この段階で把握できる室蘭市の代表的な特性は「自然な」、「のどかな」、「古い」、「野暮ったい」、「停滞的な」、「寂しい」というのが挙げられる。

地区ごとのイメージプロフィールを比較すると、全地区ともにかなりの特徴が表われている。特に、「広々とした－窮屈な」、「美しい－醜い」、「新しい－古い」、「にぎやかな－寂しい」、「自然な－人工的な」、「歴史・伝統的な－歴史・伝統的でない」といった６つの特性において、地区間による差が顕著であると言える。

図－３は室蘭市のイメージプロフィールを年齢別に表わしたものである。全体的な特性は、年齢の若い層では否定的なイメージを持っており、高齢になると肯定的なイメージを持っている。



図－２　室蘭市と地区のイメージプロフィール



図－３　室蘭市の年齢別イメージプロフィール

5．イメージ構造分析

（１）因子軸の抽出

次に、室蘭市と室蘭市を構成する９地区のイメージについて、ＳＤ法による因子分析を行った。その結果の概要を表－２に示す。

これによると、固有値が１より大きいのは第５因子までで、第５因子までの累積寄与率は６７．９％と、説明力としてはそれほど低い値ではないと考えられる。

次に、因子負荷量をもとに因子軸の解釈をしていくこととする。まず、第１因子は「新しい－古い」、「洗練された－野暮ったい」、「にぎやかな－寂しい」、「発展的な－停滞的な」といった活動的な形容詞対から構成されているため『活動性』の軸であると解釈した。第２因子は「自然な－人工的な」、「のどかな－張り詰めた」、「快適な－不快な」などの形容詞対より『アメニティー』の軸と解釈した。第３因子は「わかりやすい－わかりにくい」に代表されるように『都市構造』の軸と解釈した。第４因子は「変化に富んだ－単調な」、「立体的な－平面的な」、「美しい－醜い」といった視覚に訴え掛ける形容詞対からなっているため『視覚性』（変化・特色性）の軸。第５因子は『情緒・雰囲気性』の軸と解釈した。

図－４はこれらの第１因子から第５因子までの解釈と因子間の関係を図示したものである。

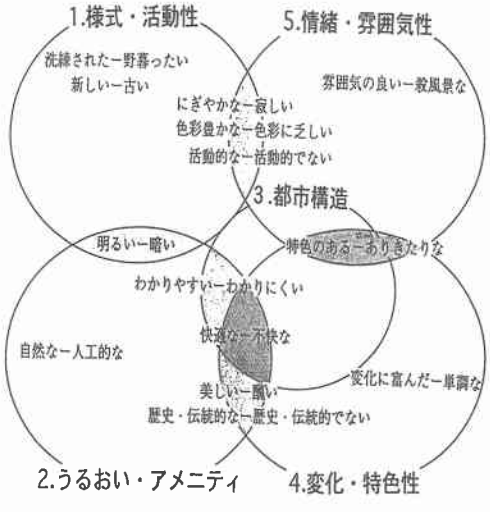
以上の結果から、室蘭市と室蘭市を構成する９地区のイメージを規定する因子を抽出することができた。

（２）属性別のイメージ特性

次に、調査対象者の属性の違いによってイメージの規定因子上でどのような違いがあるかを検討する。ここでは、属性として性別・年齢別に着目し、その違いによってイメージにどのような差があるかを探ることとする。図－５は第１因子をＸ軸、第２因子をＹ軸に置き、それぞれの平均因子得点を算出し、規定因子上に位置付けたものである。この図からわかることは、男・女によって第２因子軸を境に分離しているということである。この因子軸は、アメニティーの軸であり、すべての年齢層において女が男より良いイメージを抱いていることがわかる。

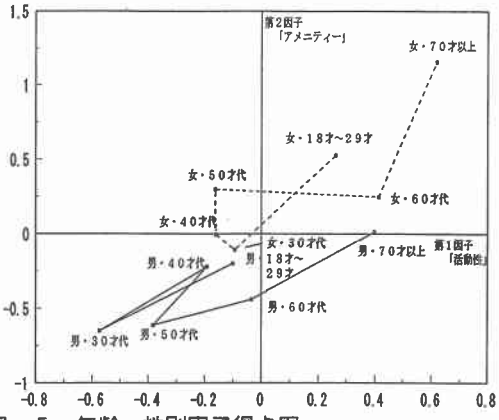
表－２　因子分析結果の概要

No.	イメージ項目（形容詞対）	因子１	因子２	因子３	因子４	因子５
9	新しい－古い	-0.710	0.166	-0.090	-0.338	-0.191
14	洗練された－野暮ったい	-0.706	0.033	-0.226	-0.215	-0.283
15	すっきりした－ごちゃごちゃした	-0.691	0.190	-0.094	-0.127	-0.335
2	明るい-暗い	-0.668	0.332	-0.087	-0.197	-0.345
18	にぎやかな－寂しい	-0.631	0.051	-0.015	-0.077	-0.517
16	発展的な－停滞的な	-0.628	0.030	-0.227	-0.285	-0.400
1	広々とした－窮屈な	-0.617	0.270	0.183	-0.047	-0.085
10	まとまりのある－まとまりのない	-0.529	0.244	-0.089	-0.176	-0.442
22	自然な－人工的な	-0.107	-0.708	0.036	-0.357	-0.264
11	のどかな－張り詰めた	-0.197	0.664	-0.072	-0.058	-0.196
13	快適な－不快な	-0.232	0.610	-0.452	-0.050	-0.220
23	歴史・伝統的な－歴史・伝統的でない	-0.017	0.435	-0.309	-0.420	-0.128
12	わかりやすい－わかりにくい	-0.227	0.616	-0.612	-0.027	-0.056
3	特色のある－ありきたりな	0.050	0.220	-0.480	-0.499	-0.409
8	変化に富んだ－単調な	-0.305	0.075	0.019	-0.816	-0.014
5	立体的な－平面的な	-0.331	0.039	-0.072	-0.610	-0.341
7	美しい－醜い	-0.208	0.447	-0.053	-0.595	0.010
19	雰囲気の良い－殺風景な	-0.262	0.350	-0.012	0.095	-0.884
21	魅力的な－魅力のない	-0.228	0.139	-0.197	-0.259	-0.798
20	協調的な－孤立的な（排他的な）	-0.348	0.084	-0.044	-0.017	-0.701
6	活動的な－活動的でない	-0.406	0.083	-0.348	-0.126	-0.645
4	親しみのある－よそよそしい	-0.285	0.357	0.088	-0.231	-0.603
17	色彩豊かな－色彩に乏しい	-0.438	0.177	-0.101	-0.330	-0.573
	固有値	10.46	2.23	1.73	1.42	1.02
	寄与率（%）	42.38	9.15	7.07	5.41	3.86
	累積寄与率（%）	42.38	50.53	58.60	64.01	67.87



図－４　因子構造図

さらに、第１因子に着目すると、男・女とも「１８～２９才」から３０才代の間でマイナスに移行し、３０才代からは徐々にプラスに移行していくという特徴が見られる。この第１因子は活動性の軸であり、１８～３０才代の間ではこの活動性の因子に対して様々な受取り方をしているのではないかと思われる。



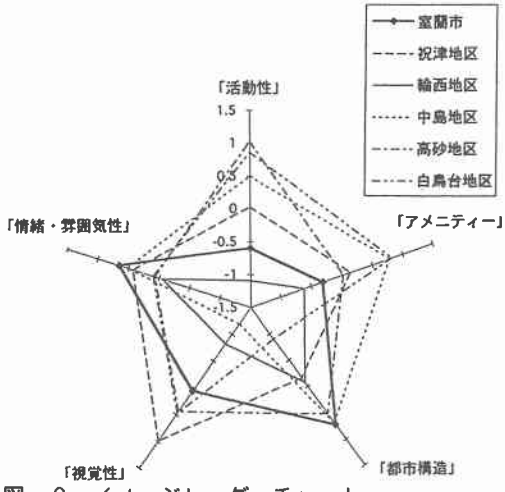
図－５　年齢・性別因子得点図

（３）都市・地域のイメージ構造分析

次に、室蘭市の個性つまりイメージがどのような構造をしているのかを明らかにしていく。まず、室蘭市と各地区に対して、第１～第５因子までの平均因子得点を求めた。さらに、それら因子得点を基に規定因子軸上に都市・地域を配置したものが図－６である。図中には室蘭市と特徴的なイメージ構造を持った祝津地区、中島地区、輪西地区、高砂地区、白鳥台地区の５地区を表示した。この図より、各地域のイメージの特徴・個性が容易に理解できると思われる。

この図から、室蘭市のイメージ構造は、第１因子の『活動性』と第２因子の『アメニティー』において低いという特徴を持っており、第５因子の『情緒性』、第３因子の『都市構造』においては高いというイメージを持っている。次いで、室蘭市の絵鞆半島先端に位置し、室蘭港と内浦湾に挟まれ景観的にも変化に富んだ祝津地区のイメージ構造は、第３因子の『都市構造』においては低く第４因子の『視覚性（変化・特色性）』では室蘭市の中で１番高い値を示しているのが特徴である。室蘭市の商業中心地である中島地区のイメージ構造は第４因子の変化・特色性の値が室蘭市の中で一番低く、第１因子の活動性の値が高いのが特徴である。

以上の解釈してきたように、都市のイメージ構造を解釈するには、地区・地域の特徴を明らかにし、その特徴が平均化されたのが都市であるとするのではなく、地区・地域の持つ特徴もその都市の特徴と解釈すべきだと考えられる。



図－６　イメージレーダーチャート

６．あとがき

本研究では、室蘭市と室蘭市を構成する地区に対するイメージの構造分析を行ってきたが、慎重な形容詞対の選定によって都市の構造的、視覚的な面からさらに拡大した総括的なイメージ因子を抽出することができたと思われる。さらに、都市に対するイメージを調査しようとする際、その都市を構成している地区についても同時に調査することの重要性を示すことができたと思われる。

室蘭市のイメージを構成する５つの因子の『活動性』、『アメニティー』、『都市構造』、『視覚性（変化・特色性）』、『情緒・雰囲気性』の軸は室蘭市のイメージ構造を示すだけではなく、地区の個性・特徴を端的に表現するものであると言えよう。

今後の課題としては、室蘭市を構成している構成地物に着目して、室蘭市のイメージに影響を与えると思われる構成地物のイメージ想起率を取り上げ、本研究で得られたイメージの規定因子と何らかの関係があるかについて研究を進める予定である。

参考文献

1)西井和夫:地域イメージとその構成に関する風土分析手法　土木計画学講演集No.14(1) p213-p220 1990
3)石見利勝・田中美子:地域イメージとまちづくり 1992
4)Kevin Lynch著　北原理雄訳:知覚環境の計画 1979
5)日本建築学会:建築・都市計画のための調査・分析手法 1987
6)室蘭市:室蘭市都市景観形成基本計画調査報告書 1995